

第五章 宇治の姉妹の物語 匂宮、薫らとの恋物語始まる

[第一段 新年、阿闍梨、姫君たちに山草を贈る]

*年替はりぬれば(年が変わって初春になると)、空のけしきうららかなるに(天気も和らいで)、*汀の氷解けたるを(池の氷が解けているのを)、*ありがたくもと眺めたまふ(姫君たちは意外なほどの父宮亡き後の時が過ぎる早さと御覧になります)。*「年替はりぬれば」は注に<薫二十四歳となる。>とある。が、この文の主語は宇治の姫君らしい。*「汀(みぎは)」は<水際>。「氷解けたる」は、それまで水面に張っていた氷が解けている、ということだから、見馴れていた庭の池のこと、かと思う。*「ありがたし」は、有り得ない事の希少価値に感謝する語用と、有り得ない事に当惑して困る語用とがあって、文意が分かり難い。が、下文を読み進むと、姫君たちは季節の移ろいに時の経過の早さを思い、まして悲しみの中に堅く閉じ籠って護っていた父宮との思い出を、忘れさせようとするかの春の和みに、却って反感しているようなので、この「ありがたし」は<困惑>であり、「も」はその意外性の強調らしい。

聖の坊より(ひじりのぼうより、阿闍梨の僧房から)、「雪消えに摘みてはべるなり(雪が消えたので摘んだものです)」とて(として)、沢の芹、蕨などたてまつりたり(沢のセリやワラビを贈って来ました)。*斎の御台に参れる(それらは新年の年神棚にお供えしました)。*「斎の御台(いもひのみだい)」は神棚だろうが、ヤフー百科には「神棚」項目に、「日本では神々は、常は山などにおり、祭りに応じて訪れ来るとの信仰が主であったから、常設の祭場は少なかった。貴族の邸宅には早くから宅神、邸内神、屋敷神の祠(ほこら)が設けられ、地方でも神事に関係の深い家筋には、斎屋(いみや)、精進屋、ハナヤ(鹿児島)など設ける例は多かったが、いずれも別棟である。母屋(おもや)に棚を設けるとするのは、新年の年神棚(としがみだな)がよく示すように、臨時の祭り場という意味が濃い。」とあって、この新年の場面と合致する。

「所につけては(土地柄で)、かかる草木のけしきに從ひて(こうした草木が生ることで)、行き交ふ月日のしるしも見ゆるこそ(移り変わる季節の目印になるのは)、をかしけれ(情緒がありますね)」

など、人びとの言ふを(など女房たちが言うのを)、「何のをかしきならむ(何の情緒があるものか)」と聞きたまふ(と姫君たちはお聞きになります)。

「君が折る峰の蕨と見ましかば、知られやせまし春のしるしも」(和歌 46-18)

「いつもなら 春のしるしの はつわらひ」(意識 46-18)

*注に<大君の詠歌。「君」は父をさす。「折る」「居る」の掛詞。「ましかば一まし」反実仮想の構文。>とある。父君が山に存命であって、手折ってくれたワラビなら、喜んで受け取れたらろうに、春のしるしとして。

「雪深き汀の小芹、誰がために摘みかはやさむ親なしにして」(和歌 46-19)

「親無くて 誰がためにする 芹摘みか」(意識 46-19)

*注にく中君の唱和歌。「小芹」の「小」に「子」を響かす。「親」と「子」は縁語。>とある。「ゆきふかし」は<行き深し=遠ざかった>。「みぎは」は<御際=御臨終>。「行き深き御際」で<父宮が亡くなって月日が経ち>を複意しているのだろう。「摘みかはやさむ」は<摘んだりなどするものか>。「摘み」は「摘む」の連用名詞で<摘むこと>。「かは」は<どうしてそれが~なのか、そうではない>という疑問形の否定構文を示す論理性の係助詞。「や」は強調感嘆の<まさか>。「せむ」は「す(為、動作する)」の未然形に意志の助動詞「む」が付いたもの。

など(などと姫君たちは)、はかなきことどもをうち語らひつつ(故宮を偲んで語り合いながら)、明け暮らしたまふ(毎日を送りなさいます)。

中納言殿よりも宮よりも(薫中納言殿からも匂兵部卿宮からも)、折過ぐさず訪らひきこえたまふ(年始の御見舞品を届け申しなさいます)。うるさく何となきこと多かるやうなれば(品物も文面もいろいろと多くあったようですが特に進展もなく)、例の(有り触れた事なので)、*書き漏らしたるなめり(側女房も書き留め損なったようです)。*「書き漏らしたるなめり」は注にく『一葉抄』は「紫式部か詞也」と指摘。『全集』は「薫、匂宮の言動に立ち合った人が見聞を書きとめたものによって、語り手が語っているという形式。このときの薫や匂宮の手紙は書きとめてなかったとする語り手の省筆の技法」と注す。>とある。

[第二段 花盛りの頃、匂宮、中の君と和歌を贈答]

*花盛りのころ(桜の花盛りの二月下旬頃)、宮(兵部卿宮は)、「*かざし(昨年の春に姫と詠み交わした「かざし」の和歌)」を思し出でて(を思い出しなさい)、*その折見聞きたまひし君たちなども(その歌の贈答を見聞きなさいていた長谷寺詣でに同行した貴公子たちも)、*「花盛りのころ」は注にく桜の花の盛りのころ。二月下旬ころ。>とある。ところで、是を私が読んでいる今現在は2013年3月26日だが、ちょうど東京の桜は満開だ。旧暦の二月下旬とは正に今頃でちょっとした奇遇だ。それにしても、今年の三月は記録的な高温だったらしく、桜の開花が例年よりも2週間近く早かったらしい。とすると、例年並みなら、東京ではまだ桜は花盛りではなかったことになり、桜は散るのが早く開花期間が短い所為か、何とも微妙な感じだ。それに、この冬は、是もまた記録的に雪が多くて寒かった、というのだから、何となく不穏にも思う。また、2011年3月11日の東日本大震災から丸二年経過したというのに、いや、あまりにも大災害だったことからすれば、まだ二年しか経っていないからか、復旧もなかなか進んでいないようだ。が、何よりも福島第一原発の全電源喪失によるメルト・ダウンに抛る放射能汚染は、水素爆発で吹っ飛んだ建屋の姿もそのままに、未だに遅々として手が付けられず、国土破壊という取り返しのつかない過ちを犯しながら、方針転換を打ち出せないこの国の現状を見ると、このまま日本が滅び行くのかどうかは、日本だけが難しい問題を抱えている訳では無いので、短絡には考えられないが、滅び行く国が自立反転できずに滅び行く姿の一面は見せ付けられた気がする。いや、是は個人が諦める諦めないとは別次元で、とは言え勿論、諦めない人が明日を切り開くことは間違い無いが、国民の特に為政者の知的水準として、ヒトが大地大洋の恵を受けて生きる尊さという価値を、共有認識出来ない悲劇の救いようの無さは、本当に味気ない。分業化が進んだ都市国家に於いて、その細分化されて先鋭化した生産効率の高い技術者は、それら各技術者の生産部品を統合した製品の企画者を買われないと生存できないので、統合原理によって都市に多くの生活者が集中しがちだが、その都市生活の中心も食を賄うように形成されるという、ヒトの有機物性が基本要素となっている。ところが、都市生活ではあまりに細分化された日常に生きることで、国家組織の概念認識を見失いがちだ。放って置けば、子供は冷蔵庫があれば生きられると考えるかも知れない。社会は実現された生産規模に応じて人口が増えるので、いつまでも生産効率の向上が必要となり、あたかも都市国家の維持が主要命題であるかに没

日常化するが、集団を国家組織に体系化する根源的価値は共助によって個体の有機物性を護るという共同体認識にあるのであって、都市効率などはその基礎構造の安定を前提としてしか実効も実現も成し得ず、実際に意味がない。このことを国民が身を以て認識できるように、せめて今からでも、平時こそ、農耕や土木林業または漁業などの自給生活体験と災害救助を課した、最低二年間の徴兵制を実施する必要を改めて痛感する。但しこの兵役は、あくまでも自立意志を培う為の組織経験を負わす共同生活であり、先ずは個人が自己責任を負えるように自身の有機物性を自己管理できるような個室の完備は自衛軍の管理運営上の必要条件項目となるものだが、その上で、義務としての共同作業の意味を、単に単独作業より仕事が捗ったという事に留まらず、個人の権限を越えた組織権力によって護るべく企画された社会構造の中で、各個人は一定の規範に則って自由に生きている、という国家概念を徹底的に理解させた上での訓練でなければならず、従って自立した国民に未来を託す以上、決して物理的な強制は微塵もあってはならず、しかし同時に共同体に対する権利と義務の実行を習得できない者には、決して社会制度上の責任者資格は与えない、という機構設計とするべきだろう。*「かざし」は注に<句宮が中君に「山桜句ふあたりを尋ね来て同じかざしを折りてけるかな」という和歌を贈ったことを思い出す。>とある。*「その折見聞きたまひし君たち」は注に<句宮に同行した公達。>とある。

「いとゆゑありし親王の御住まひを(実に風流だった八宮のお住まいを)、まとも見ずなりにしこと(もうお訪ね申すことも無くなってしまったんですね)」

など(などと八宮のご逝去について)、おほかたのあはれを口々聞こゆるに(全体に残念がる話を口々に申すと)、いとゆかしう思されけり(句宮もとても懐かしく思われなさいました)。

「つてに見し宿の桜を、この春は霞隔てず折りてかざさむ」(和歌 46-20)

「頼り見た 桜を次は 手折りたい」(意識 46-20)

*「つてに」は<ものの序でに>という言い方のように渋谷訳文にあり、辞書類にもそうした語用が認められているが、困ったことにその語用の引用例が古語辞典でも大辞泉でも大辞林でも、揃ってこの当歌を当てていて、傍証足り得ない。「つて」の一般的な語用は<意を相手に伝える手段や方法>であり、その際に頼りにする<もの>でもある。そこで、昨春の句宮と妹姫の歌の贈答場面を改めて見直して見ると、句宮は自分が宿りした源殿の別荘の庭の桜を手折って、同じ山桜が咲いていた山荘に住まう姫に、同じ王族の誼でという贈歌を結び付けて、お近付きの印しにと殿上童に持たせた、ということだった。そして、「かざし折る花のたよりに山賤の垣根を過ぎぬ春の旅人」(和歌 46-04)と返歌したの妹姫だった。つまり、句宮は山桜を姫への懇意を託す頼みの小道具として使ったのであり、それは正に<手掛かりになるもの>だったわけだ。鍵は多分、「見し」の解釈だろう。この「見る」は視認ではなく思考を意味する。大意は、昨春は御印として童に此方の桜を手折らせて送ったが、今年は私が「霞隔てず」に其方に伺って、桜のように満開になった女を口説いて愛したい、だ。

と、*心をやりてのたまへりけり(と句宮は宇治の姫君に思いの丈をお書きなさいました)。*「心を遣る」は<好き勝手に考える>みたいな語感のように辞書に説明がある。ここでもそういう語用には見えるが、句宮がどう考えたのかは掴み所がなく、ざっと「やりて」を<思いを馳せる→想像を膨らませる>結果としての<思いの丈>と言って置く。

「あるまじきことかな(何て大胆な)」と見たまひながら(と妹姫は句宮の贈歌お読みになりながら)、いとつれづれなるほどに(あまりに単調な生活に気晴らしもしたく)、見所ある御文の(兵

部卿宮の立派な御文面に)、うはべばかりを*もて消たじとて(形だけでも何とか取り繕おうと、こう返歌なさいました)、 *「もて消つ」は<無いものにする→無意味にする>。「もて消たじ」は<無意味にしない→印しは残す>みたいな言い方で<取り繕う>よりは<何とか取り繕う>くらいに聞こえる。

「いづことか尋ねて折らむ、墨染に霞みこめたる宿の桜を」(和歌 46-21)

「折ろうにも 黒く霞んだ 山桜」(意訳 46-21)

*注に<中君の返歌。「宿の桜」「霞」「折る」の語句を用いて返す。>とある。

なほ(未だに姫が)、かくさし放ち(このように余所余所しく)、つれなき*御けしきのみ見ゆれば(打ち解けない御姿勢ばかりが見えるので)、まことに心憂しと*思しわたる(匂宮はまことに不満に思い続けなさいます)。 *「みけしき」の「御」は妹姫への尊称。 *「思しわたる」の主語は匂宮。

[第三段 その後の匂宮と薫]

御心にあまりたまひては(その御不満も胸に抑えかねて)、ただ中納言を(いつも中納言を)、とざまかうざまに責め恨みきこえたまへば(熱心に取持っていないのではないかと、自分のことを姫に悪く言っているのではないかと、いろいろと問い詰めて文句を仰るので)、をかしと思ひながら(薫君はその匂宮の苛立ちを、面白がりながら)、いと*うけばりたる後見顔にうちいらへきこえて(すっかり親代わりを引き受けたような保護者顔をして)、*あだめいたる*御心ざまをも*見あらはす*時々は(匂宮が姫君を風流ごとのお相手にしたいという下心で手紙を送ったことが露骨に分かる場合には)、 *「受け張る」は<責任ある立場を自負する態度をする=管理権限者ぶって尊大に振舞う>。 *「あだめく」は<うわつく。浮気っぽく振舞う。>と古語辞典にある。匂宮が姫と風流ごとの話題で文を交わすこと、を言っているらしい。が、それ目当てで匂宮が姫に近付いたのは、むしろ薫君が匂宮にそう仕向けるように、宇治の姫君たちを紹介したのだから、何も今さら薫君がそれを咎め立てする筋合は無い筈だが、今の宇治山荘はまだ八宮の喪中であり、宇治に手紙を遣る時の基本的な姿勢はお悔やみの見舞いであるべきだ、という形式主義をにわかに持ち出して、薫君は常識人ぶった保護者ぶりを演じた、ということらしい。 *「みこころざま(御下心)」の「御」は匂宮への尊称。 *「見あらはす」は<隠れている物事の実態を見つけ出す。また、あばき出す。見破る。>と大辞泉にある。主語は薫君。 *「ときどきは」というのは、宮が姫に手紙を送った、その内容について<風流めいた文面の場合には>という意味と読んで置く。

「いかでか、かからむには(どうもそういう趣きのお手紙には、姫君もお返事なさりにくいのでしよう)」

など(など御助言めかして)、申したまへば(申しなさると)、宮も御心づかひしたまふ*べし(宮も御言い訳なさるようで)、「心になふ*あたりを(気に入った結婚相手が)、まだ見つけぬ*ほどぞや(まだ見つからないものだから)」とのたまふ(と仰います)。 *「べし」は判断意を示す論理助動詞で、終止形は話者が結論を示す結句語用の場合も当然あるが、連用中止「べく」が対象主語の判断意を示して、それに続く事態推移として下に報告叙述を導くのに対して、終止中止「べし」は話者の対象体に対する客観的な評価判断意を示して、それを事情説明として下に結果叙述を導くという構文用法がある、ように思う。で、これも終止

中止の読点で下に続く構文、かと思う。 *「あたり」は<適格な誰か>だろうが、「適格」とは<結婚相手>のことなのだろう。 *「ほどぞや」の「ほど」は<事情>であり、「ぞ」は理由説明の係助詞、「や」は説得強調の間投助詞。

*大殿の六の君を思し入れぬこと(源殿の六姫を匂宮が意中に御思いでないことは)、なま恨めしげに(何とも期待はずれに)、*大臣も思したりけり(確かに源大臣に於かれてもお思いなのでした)。 *「おほとものろくのきみ」は注に<夕霧の六の君。藤典侍腹の姫君。「匂宮」巻に初出。>とある。一条宮の養女として、六条院夏の町で育てられていると語られていた。 *「おとども」は<源大臣も>だが、この列挙の助詞「も」は文脈上は匂宮の発言の関係者の一人として源殿が登場している意味を示していて、それは即ち匂宮の発言の傍証になっているという事柄に係る語用なので<なるほど確かに匂宮の仰る通り>が含意されている。ただ、この場面自体には源殿の登場は無いので、是は弟君に当たる薫君目線での地文として読むべきなのかとも思ったが、源殿も主要な関係者には違いないので、この<確かに>という関係性を補語すれば、彼を主語とした事情説明でも然程には違和感も無い。

されど(しかし匂宮は)、「*ゆかしげなき仲らひなるうちにも(お里の知れた親戚同士である上に)、大臣のことごとくわづらはしくて(姫の父大臣である伯父上の口煩さが煩わしく)、何ごとの*紛れをも見とがめられむがむつかしき(ちょっとした浮気さえ見咎められそうなのが敬遠される)」と、*下にはのたまひて(と側近女房には内心を仰って)、*すまひたまふ(拒んでいらっしやいます)。 *「ゆかしげ」は何か魅力を感じたものを良く知りたいと思う好奇心で、「ゆかしげなき」はそういう興味が湧かない大体察しの付く身近なものであり、親戚であるうえに同じ六条院育ちとなると、匂宮と六姫は如何にも<お里の知れたもの同士>だ。 *「まぎれ」は<浮気>と渋谷訳文にある。従う。 *「下」は<内心>の語用だろうが、これを「思ふ」ではなく「のたまふ」ということは<内々の身近な女房に言う>ということなのだろう。 *「すまふ」は「争ふ」と表記され、正に「相撲」のように<組み争う、挑む>という語用ではあるらしいが、転じてなのか同義なのか良く分からないが、何かを<拒む、拒否する>という語用もあり、特に指名などを<辞退する>という語用がこの物語では多い気がする。

*その年、*三条宮焼けて、入道宮も、*六条院に移ろひたまひ(この年は三条宮が火事に遭い、入道宮も六条院に移り住みなさって)、何くれともの騒がしきに紛れて(何かと物騒がしきに紛れて)、宇治のわたりを久しう訪れきこえたまはず(薫君は宇治山荘に久しくお出掛け申しなさいませんでした)。 *「その年」と言っても、まだ二月か三月の春のことで、一年を振り返って見た纏めの趣きでもなさそうで、例年に無い事柄を示す言い方にしても、事が火事であってみれば、妙に唐突感のある聞き馴れない語り口だ。 *「三条宮焼けて」は普通に驚いた。特に詳しい説明もないあっさりとした語り口に却って、当時の読者なら周知の、この記事に準えられる実際の火事があったらしいことが窺える。 *「六条院に移ろひたまひ」は、やはり春の町の寝殿西側なのだろう。寝殿西側はずっと入道宮の六条院御座所だった筈だ。匂宮は二条院に居るようだが、内親王が六条院に住んでいた筈で、しかしそれも母の明石中宮の領分である寝殿東側か、御祖父母が住まった東の対というのが順当ではある。また、薫君も三条宮邸に御座所はあったのだろうが、本居は冷泉院だ。

*まめやかなる人の御心は(忠実な保護者という薫君の御方針は)、またいと異なりければ(世間で言うものとは非常に異なったものなのでして)、いとどのどかに(大変悠長に)、「おのがものとはうち頼みながら(姫が自分の女になる事を期待しながら)、女の心ゆるびたまはざらむ限りは(女がその気にお成りにならないうちは)、*あざればみ*情けなきさまに*見えじ(常軌を逸した情緒のない力尽くでの情交はしないで置こう)」と思ひつつ(という下心で)、「*昔の御心忘れぬ方

を、深く見知りたまへ(姫には私が、故宮の御委託を忘れていないという点を深くお分かり頂きたい)」と思す(とお思いなのです)。 *「まめやか」はくまじめなさま。 >と古語辞典にあるが、この「まめやかなる人」は軽口の揶揄口調でく忠実な保護者=女を細目に気遣う男>という掛詞の洒落なのだろう。 *「あざればむ」はく冗談めかす>でもあるが、此处では強姦のことなので、より即物的にく狂ったように=常軌を逸して>という言い方なのだろう。 *「なさけなし」はく情緒が無い=乱暴だ=腕尽くだ>。 *「見ゆ」はく見せる=目に遭わせる=犯す>。 *「むかし」はく故宮>を意味するらしい。

[第四段 夏、薫、宇治を訪問]

その年、常よりも暑さを人*わぶるに(その年は例年よりも暑さを誰もが気弱に思う夏で)、「*川面涼しからむはや(川辺なら涼しいんじゃないかな)」と思ひ出でて(と思ひ出して)、にはかに参うでたまへり(薫君は直ぐに宇治山荘にお出掛けなさいました)。 *「わぶ」はく弱る、気弱になる、弱気に思う>。 *「川面」は「かわづら」と読みがありく水面>ではなくく川辺>のことらしい。

朝涼みのほどに出でたまひければ(朝涼みの早い内に出発なされたので)、あやにくにさし来る日影もまばゆくて(あいにく昼日中の到着となって、南表に差し込む日の光が眩しいので)、宮のおはせし西の廂に(宮がお住まいになっていた西の廂の間に)、宿直人召し出でておはす(管理人を呼び出して案内させて、薫君は休んでいらっしゃいます)。

そなたの母屋の仏の御前に(その西廂の東隣になる母屋西側の仏間の仏壇の前に)、君たちものしたまひけるを(姫君たちがいらっしゃったが)、*気近からじとて(客人に近付きすぎないように)、わが御方に渡りたまふ御けはひ(母屋東側の御自分たちの御部屋に移りなさろうとしている姫君たちの気配が)、忍びたれど(音を立てないようにしていても)、おのづから(自然と)、うちみじろきたまふほど近う聞こえければ(その動きが近く聞こえたので)、*なほあらじに(どうしても気になって)、こなたに通ふ障子の端の方に(母屋と西廂の間の襖引戸の端のほうに)、かけがねしたる所に(落とし錠がしてある所に)、穴のすこし開きたるを見おきたまへりければ(穴が少し開いているのを見知っていたので)、*外に立てたる屏風をひきやりて見たまふ(手前の屏風を引きずらして母屋を覗き見なさいます)。 *「けちかからじ」は「けちかくあらじ」で、「あらじ」はくあるようにはしない=あってはいけない=ないようにする>なので、「気近からじとて」はく近くに居ないようにするために>。 *「なほあらじ」の「なほ」はくそのままの推移・状態で>という意味らしく、「なほあらじに」はくそのままにはしておけずに=どうしても気になって>。 *「外(と)」は、襖障子の立て付けから見て、とは即ち家屋構造から見て、内側が母屋で外側が廂間なので、薫君から見ればく自分の方=手前>だ。

*ここもとに几帳を添へ立てたる(しかし、向こう側にも几張を添え立ててあって)、「あな、口惜し(あら惜しい)」と思ひて(と思つて)、ひき帰る(薫君がもとに戻ろうと戸を離れかけた)、折しも(ちょうどその時に)、風の*簾をいたう吹き上ぐべかめれば(風が簾を大きく吹き上げそうになったらしく)、 *「ここもと(此处許)」はく直ぐ其処>で、穴の向こう側。 *「簾(すだれ)」は母屋の内側に張ってある。更に廂と縁側の間にも下げるのだけれど、暑い夏の日のことなので、日除け用の一部を除けば廂の簾は巻き上げられて、風を通していたか。しかし、客人の薫君を西廂に通したので、母屋の西側は簾を上げて、その代わりに襖を閉めてあった、といったところか。あとの東、南、北側の廂は襖は開け放たれていて、御簾が下ろさ

れていた。だから、風は三方から出入りするが、客人の目を意識するのは表が南なので、姫たちが特に気にしたのは南廂側の簾なのだろう。

「あらはにもこそあれ(丸見えになってしまいます)。その几帳おし出でてこそ(その几帳を南側に置いておかないと)」と言ふ人あなり(という女房が居たようです)。

をこがましきものの(鍵穴からの覗き見とは子供じみて、我ながら馬鹿げているようだが)、うれしうて見たまへば(几張が退けられて中が覗けることに、薫君は嬉しくなって母屋の様子を御覧になると)、「をこがまし」は<愚劣だ>という客観描写にも見えるが、「うれし」は本人が<喜ぶ>という言い方なので、「をこがましきもののうれし」が一まとめで薫君視線での言い方に見えるので<我ながら>を補語して置く。

*高きも短きも、几帳を*二間の簾におし寄せて(丈の高いものも低いものも几張を南廂側の二間の簾に押し寄せて)、*この障子に向かひて、開きたる障子より(西母屋の仏間のこちら側の閉じた襖戸の向かい側の開け放たれた襖戸から)、あなたに通らむとなりけり(東母屋の姫君の御部屋まで通そうということなのでした)。*「高きも短きも」は注に<几帳の高さは五尺・三尺・二尺とある。以下「かうざまにもおはすべき」まで、薫の目を通して叙述する。>とある。が、だとすると、「かうざまにもおはすべき」は次段での語りとなって、「あなたに通らむとなりけり」での段落は如何にも変だ。このように同一場面の同一視点と見做しながら、段替えをする校訂姿勢は非常に疑問だ。が、私はこの段落校訂は不可欠とは言えないまでも、必ずしも不要な妨害行為とまでも思えない。それは、この段落で舞台説明が終わり、以下には人物の描写が語られる、という話題転換が有るからだ。が、それでも、「薫の目を通して叙述する。」という解釈は妥当だし、そのことと整合性のある段落校訂をするなら、やはり「をこがましきものの」から別段にすべきなのだろう。マ、それはそうと、一尺は30cmくらいで良いのだろうか。しかし、60cmくらいの高さでは目隠しに成りそうも無い気がするが。*「二間(ふたま)」は注に<仏間の南側に位置する廂間を二間に仕切った部屋。その南側の簾の前に几帳を移動する。>とある。*「この障子に向かひて開きたる障子よりあなたに通らむ」は注に<薫が覗いている障子の内側の正面を姫君たちが移動。>とある。ということは、母屋の西部屋と東部屋との間の襖戸は開いていた、ということらしい。が、「姫君たちが移動」については疑問だ。もし、「通る」が<移動する>という文意なら、「あなたに通らむ」の主語は姫君たちだろうに敬語遣いがない。女房らを含めた全員の態勢のことだとしても、主体は姫君だ。「通る(とほる)」は古語辞典に<貫く。届く。知れ渡る。>とあるが<移動する>の語意はなさそうだ。語幹の「とほ」は「遠」であり、遠くへ行く為<通過する←貫く>という語用はあるにしても、姫は他所に向向くのではなく、自室に帰るのだから、この移動は「通る」ではないだろう。「あなたに通らむ」は「二間の簾におし寄せ」られた几張の説明であって<西部屋から東部屋に、貫くように=一面続きになるように>並べてあった、という文意かと思う。ただ、結果として、そういう安全準備が整ったので、いよいよ姫たちが移動する、という文脈にはなりそうだ。

[第五段 障子の向こう側の様子]

まづ(すると先ず)、一人*立ち出でて(一人が立ち上がって)、几帳より*さし覗きて(廂際に近付いて几張の隙間から廂間越しに覗き見通して)、*この御供の人びとの(中納言殿の御供の人びとが)、とかう行きちがひ(南庭を思い思いに行き交い)、涼みあへるを*見たまふなりけり(涼み合っているのを御覧になるのです)。*「立ち出づ(たちいづ)」は<立って外へ出る。その場を立ち去る。>とあり、この言い方で<立って廂際に進み出る>という意味にも見えるが、「廂際」は文脈からして「几張」に含意さ

れていると見て、この「立ち出づ」は<立ち上がる>と読んで置く。*「差し覗く」の「差す」は強調意ではなく、何かの<中に突き通す→見通す>を意図し、具体的には目前の南廂の間越しに南庭まで<覗き見通す>と言っている、と読んで置く。*「このおおんものひとびと」は注に<薫の供人。>とある。「この」は、この文が薫君目線であることによる、のだろう。しかし、この文自体の主語は姫であり、この「この」を<自分の>と言ってしまうと、その「自分」が薫君なのか姫なのかが分かり難くなるので、この「この」は<薫君の>を更に姫目線で言う<中納言殿の>と言い換えて置く。*「見たまふなりけり」は、薫君目線とはいえ地文の語り口の客観表現。

*濃き鈍色の単衣に(その姫の姿が、黒っぽい夏喪服に)、*萱草の袴*もてはやしたる(橙色の喪袴が引き立っていて)、なかなかさま変はりてはなやかなりと*見ゆるは(却って目新しく華やかに感じられるのは)、着なしたまへる人からなめり(着ていらっしゃる方の人柄の所為のようです)。*「こきにびいろのひとへ」は、「濃し」が<色が濃い→黒っぽい>、「鈍色の」は<喪服の>、「単衣」は夏用の一枚布着物、で<黒っぽい夏喪服>。*「萱草の袴(くわんざうのはかま)」は喪服用の袴とされていたものだったらしい。「萱草色」は<染め色の名。黄みの強い橙(だいたい)色。萱草の花の色。凶色とする。かぞういろ。>と大辞林にあり、色見本や萱草の花の画像をウェブで見ても、正に「黄みの強い橙色」で、喪服にしてはあまり地味ではなく明るい印象だ。萱草の花が一日でしぼむことから「忘れ草」と異名され、それで凶色とされたのかも知れないが、色合いの派手さから見ると、喪中に赤い袴を付けられない若い子女の言い訳で、この色が用いられたように思われる。*「もてはやす」は<褒めそやす>でもあるが、此处では<見映えさせる、引き立たせる>という他動詞で、「たり(てある)」の受動表現によって、「もてはやしたる」は<引き立っている姿で>という言い方。*「見ゆる」は薫君目線ではあるのだろうが、より一般目線で、誰の目にもそう見えた、ような言い方に聞こえる

帯はかなげにしなして(その姫は赤帯を喪中らしく肩に掛けて)、数珠ひき隠して持たまへり(数珠を袖口に目立たないように隠して持っていらっしゃいました)。「おび」は注に<掛け帯。仏前で誦経などするときの女性の身仕度。>とある。「掛け帯」は大辞泉に<社寺参詣の女性が、物忌みのしるしとして用いた赤い帯。赤色の絹を畳み、胸の前に掛け、背後で結んだもの。>とある。タスキみたいなもの、だろうか。「はかなげ」は<形ばかり>や<仮に>という語用ではなく、喪用装束なのだから<服喪らしく>だろう。

いとそびやかに(とても背が高く)、*様体をかしげなる人の(立ち姿が美しい人で)、髪、桂にすこし足らぬほどならむと見えて(髪の長さは着物の裾に少し足りないくらいに見えて)、末まで塵のまよひなく(毛先まで僅かの乱れも無く)、つやつやとこちたう(艶があって豊かで)、*うつくしげなり(可愛らしげでした)。*「様体(やうだい)」は<姿。容姿。>とあるが、「そびやか」と見た目なら特に<立ち姿>のことを言っているのだろう。*「うつくし」は<愛しい、可愛らしい>。ただし、妹姫でも24歳、姉姫は26歳だ。

*かたはらめなど(横顔などは)、あならうたげと見えて(何とも幼げに見えて)、匂ひやかに(生気が香り立ち)、やはらかにおほどきたるけはひ(人懐こく大らかそうな感じで)、*女一の宮も(明石中宮腹の第一内親王も)、かうざまにぞおはすべきと(このようにいらっしゃるに違いないと)、ほの見たてまつりしも思ひ比べられて(内親王を少し押し申した印象も思い比べられて)、*うち嘆かる(薫君は胸が詰まります)。*「かたはらめ」は<横からの見た目=横顔>。*「女一の宮」は注に<明石中宮腹の女一の宮。『完訳』は「もともと薫には彼女への憧れのような恋慕があるらしい。薫の恋を規制する存在として重要である」と注す。>とある。この内親王は、今からは十年ほど前の事情になるが、匂宮巻一章二段に「女一の宮は、六条の院の南の町の東の対を、その世の御しつらひ改めずおはしまして、朝夕に恋ひしのびきこえたま

ふ」とあったので、六条院春の町の東の対に住んでいるかと思う。表向きの続柄は、薫君から見てこの内親王は、同父姉である明石中宮が産んだ今上帝の御子だから、姪の血筋に当たる。のだが、実際には、薫君が朱雀院の女三の宮と故衛門督藤原君との間の子で在ってみれば、血筋はほぼ他人と言えるほど遠い。極性の違うもの同士が距離的に近付くと強力な磁力が働く、みたいな事を符と思わせる事情。 *「打ち嘆く」は<思わず嘆息する>ようだが、薫君は自分にはとても内親王に手が出せない、という事情を嘆くのだろうか。是までに薫君の内親王への恋情や、何かしらの経緯が語られていたのなら理解の仕様もあるが、そうした下話が皆無な中でこの言い方に、脱稿逸文が無いとしたら、作者の神経を疑う。下駄を預けるにもホドがある。実際、全く文意が分からない。

またみざり出でて(また別の姫が廂際まで膝を進め出て来て)、**「かの障子は(あの襖戸は際の隙間から)、*あらはにもこそあれ(見えてしまうかも知れない)」**と、***見おこせたまへる用意(と此方を見遣りなさる気配りが)**、うちとけたらぬさまして(用心深そうで)、***よしあらむとおぼゆ(由緒ある家格を自負しているようです)**。頭つき(かしらつき、額の形や)、髪ざしのほど(かんざしのほど、生え際の髪質は)、今すこしあてになまめかしきさまなり(前の姫より少し上品で趣き深く見えます)。 *「あらはにもこそあれ」の「こそ」という強調の係助詞は、事が<あらはにもあらむ>という危険の可能性を注意喚起した言い方。 *「見おこす」の「おこす」は「遣す」で<動作を此方に仕向けてくる>と大辞泉にあり、「見遣す」は<こちらを見遣る>らしい。 *「よし」は<由緒ある家格>と読んで置く。

「あなたに屏風も添へて立ててはべりつ(廂側の襖際にも屏風を立ててございます)。*急ぎてしも(それを片付けてまでも)、覗きたまはじ(覗きなさらないでしょう)」 *「急ぎて」は、何も来て早々に<急いでは、直ぐには>という訳文になっているようだ。「しも」は<何もそんなに>くらいの一般的な強調意と取っているらしい。「急ぎてしも」がそういう語用の定型句ならそれで良いのだろうが、私が見回した限りの辞書類にはそうした説明はない。とすると、この「急ぎてしも」は、「屏風も添へて立ててはべりつ」を受けた文意と見るべきではないのか。で、「急ぐ」だが、この語は<事を早く進める>という時間制約を認識する概念らしく、古語では専ら<用意する。準備する。支度する。>と説明される。では、その「準備」は何の為かということ、「覗く」為であり、実際の準備動作は<屏風を退けて片付ける>ことになりそうだ。此処に言葉の綾があるようにも見える。女房が屏風を片付ける場合は、きちんと仕舞うのであり、薫君が片付けるのは、襖戸の際の隙間ではなく鍵穴から覗くので、ちょっとずらすだけだ。

と、若き人びと、何心なく言ふあり(と若い女房たちで気にも留めずに言う者がいました)。

「*いみじうもあるべきわざかな(何だか不安ですね)」 *「いみじうもあるべし」は<とても悪くなるかも知れない>という不安感。「べし」は可能性の助動詞。

とて、うしろめたげにみざり入りたまふほど(と言って気懸かりそうに東母屋に膝歩きで入って行きなさる体の運びには)、気高う心にくきけはひ添ひて見ゆ(気品高く責任感のある態度が感じられました)。黒き袷一襲(裏布付き喪服の一揃いを)、同じやうなる色合ひを着たまへれど(もう一人の姫と同じような色合ひで着ていらっしゃるが)、これはなつかしうなまめきて(この人は優しそうで情趣があり)、あはれげに(悲しげで)、心苦しうおぼゆ(労しく感じられます)。

髪、*さはらかなるほどに落ちたるなるべし(髪はさっぱりするくらいに少なめで)、末すこし細りて(先が少し細くて)、*色なりとかいふめる(玉虫色とか言うのでしょうか)、*翡翠だちてい

とをかしげに(青味や赤味に光沢があつてとても変化に富み)、糸をよりかけたるやうなり(糸に撚りを掛けたように波打っていました)。 *「さはらか」は「爽らか」と表記されくごたごたしていないで、さりとしたさま。さっぱり。>と大辞泉にある。 *「いろなり」は注に<『集成』は「色なり」は、髪をつやつやした美しさをいう成語であるらしい>と注す。>とある。「糸をよりかけたるやうなり」が波打つクセ毛だとしたら、「色なり」は<見る角度で色が変わる=玉虫色>ということかも知れない。 *「翡翠だつ(ひすいだつ)」は注に<かわせみの青羽のような光沢のある美しさをいう。>とある。

*紫の紙に書きたる経を(紫の紙に書いてある経巻を)、片手に持ちたまへる手つき(片手に持っていらっしゃる手つきが)、かれよりも細さまさりて(もう一方の姫よりも細くて)、*痩せ痩せなるべし(ひどく痩せているようです)。 *「紫の紙」は特別な意味がある語用ではなく、高貴な紫色の高級紙らしい。 *「痩せ痩せ」は<ひどくやせているさま。>と大辞林にある。

立ちたりつる君も(立ち上がっていた姫君も)、障子口にゐて(襖の出入り戸口に座っていて)、*何ごとにかあらむ(何かを言って)、こなたを見おこせて笑ひたる(こちらを見て笑っているのが)、いと愛敬づきたり(とても愛想のある表情でした)。 *「何ごとにかあらむ」は注に<挿入句。薫の疑問、声が聞こえない。>とある。姉君を心配性だといって揶揄しているのか、中納言殿がそんな子供じみた事はしないだろうと談笑しているのか、そんなようなところなのだろう。それにしても、穴はどれくらいの大きさなのか。どんな風に見えたのか。光量が少なくてぼんやりしていたのか、それともはっきり見えたのか。視野は狭いのか広いのか。角度は自由が利いたのか。場合によっては、薫君は姫君の顔を二人とも、はっきり正面からも横顔も見ることになる。それが何だ、どうした、という気もするが、それすら普通は有り得なかったとすれば、人が顔を見ることの意味は基本的に大きいので、是は非常に重大な出来事だったようにも思える。当時の読者には、この文末は非常に印象的だったのかも知れない。

(2013年3月29日、読了)